越境地域政策研究フォーラム

【シンポジウム】「越境地域間交流研究シンポジウム」

パネリスト

青森・岩手県境地域：丹羽浩正氏（八戸学院大学）

中国地方県境地域：藤山浩氏（島根県中山間地域研究センター）

佐賀・福岡県境地域：堀尾容康氏（九州大学）

中国北部省境地域：郭暁川氏（内蒙古大学）

コーディネーター

戸田敏行氏（三遠南信地域連携研究センター長）

日　時：2014 年 2 月 14 日　11：25 ～ 12：45

場　所：愛知大学豊橋校舎　記念会館 3F

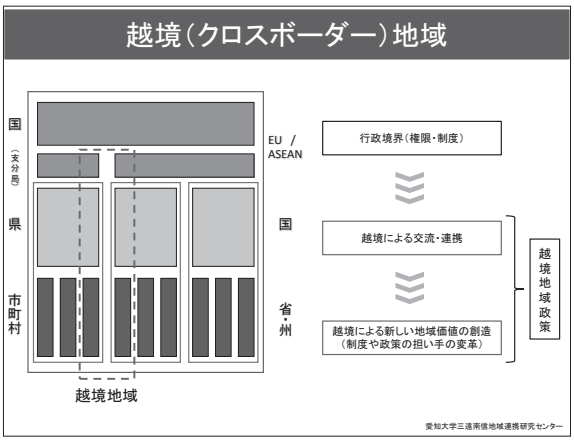
1．趣旨説明

○戸田：皆さん、こんにちは。愛知大学三遠南信地域連携研究センターの戸田です。ここからは「越境地域間の交流の研究シンポジウム」ということで、各地区の状況をお話しいただくというシンポジウムを始めさせていただきたいと思います。

日ごろ、大西先生からご指導をいただいておりますので、襟を正しながら聞かせていただきました。今日は内モンゴルから郭先生にもお越しいただいておりますが、中国語では密入国を意味するようでして、最初に「越境」を書いて中国にもっていきましたら、郭先生が「これは、まずい」といわれたことを思い出します。「クロスボーダー」ということで、どのように今あるボーダーをクロスオーバーしていき、質的にも、量的にも、新しい地域あるいは地域像をつくっていくのか、そういう想いで始めております。

それでは、最初にパネラーの皆さんを簡単にご紹介させていただきたいと思います。会場から向かって左、私の左手から、北から順になっておりますが、八戸学院大学副学長の丹羽浩正先生です。続きまして、島根県中山間地域研究センター研究統括の藤山浩先生です。続きまして、向こう側に移ります。九州大学教授の堀尾容康先生です。そして、海外になります、中国の内蒙古大学経済管理学院長の郭暁川先生です。

先生方には、後ほど順次ご発言をいただきたいと思います。最初に私から趣旨説明をさせていただきます。お手元に資料を配布させていただいておりますので、ご覧いただきながら、シンポジウムを聞いていただければと思います。



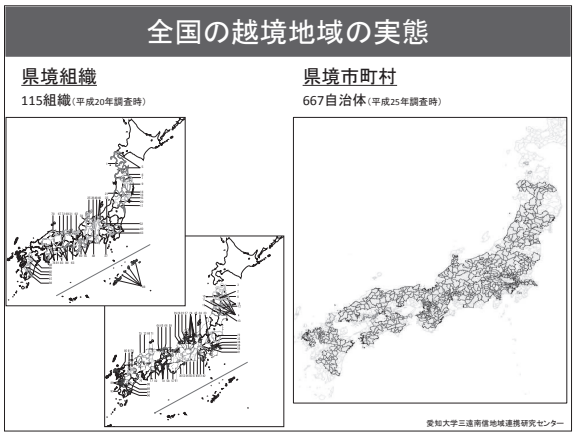
＜資料 1　クロスボーダーゾーン＞

最初に「クロスボーダーゾーン」とありますが、これは先ほど申し上げましたように、越境地域を対象とするということです。左に概念図が出ております。こちらが我が国でいえば、国県市町村ということです。今日は、分科会ではアジアの ASEAN（東南アジア諸国連合）、それから EU（欧州連合）という国際的な越境（国境）も扱われますが、階層的には、このようなことになるということです。越境エリアとは、このような従来の境界というものを跨いだエリア、クロスボーダーのエリアとい

うことになります。

こちらに、その概念を書いております。一つには、この境界が両地域を結び合わせることで、越境による交流や連携という価値の創造が一つ出てまいります。もう一点は、この「県」とか「国」、あるいは「市町村」と書いてありますが、このような行政の区域に権限や制度という地域のシステムがあるということになります。

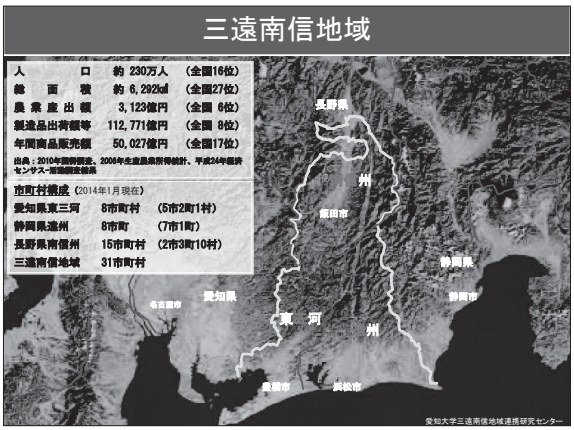
このシステムをクロスボーダーするということは、「越境による新しい地域価値の創造」で、これまでの制度あるいは政策では越えられなかった、あるいはその担い手がつくれなかった部分にチャレンジをしていくという質的な面というものがあろうかと思います。二面性ということからクロスボーダー地域の政策を考えていきたいということです。



＜資料２　全国の越境地域の実態＞

では、そういう越境地域が存在するのかということです。これは日本国内の例ですが、この左手に書いておりますのが、県境を越える組織像です。今日は、全国いろいろなところからお越しになっておられます。この一つ一つに属する地域、パネラーもそうですし、会場にいらっしゃる方も地域の運営をしていらっしゃる方が多いと思います。その意味で、芽としては全国にあるということだと思います。また、これは境界エリアにある市町村を挙げておりますが、このような見方をしますと 700 弱です。日本の市町村の 4 割が越境性というものを内在しているということになります。

従いまして、中心から中心をつないでいく、ブロックの中心をつないでいく、県の中心をつないでいくという階層的な従来の考え方ですが、このように境界部分をずっとつないでいく捉え方も出てくるのではないかと思います。これをどのようにして、先ほど基調講演で大西



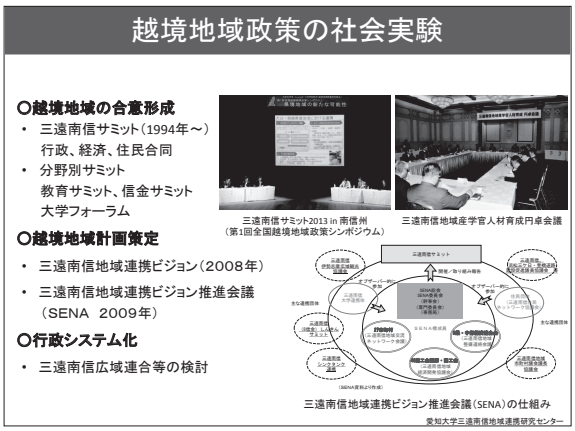
＜資料３　三遠南信地域＞

先生にお話しいただいたような越境地域の知見あるいは活動として転用していくかということだろうと思います。

三遠南信ですが、このような結び方をしてみると、という見方です。ここに書いてありますように、これはよく使う話ですが、経済ボリューム、人口ボリューム、人口でみましても 220 万人から 230 万人というボリュームの捉え方が存在してくるということになります。これは資源の捉え方になってまいります。

システムですが、これは三遠南信です。先ほどお話にありました「SENA（三遠南信地域連携ビジョン推進会議）」です。ちょっと SENA の動きが鈍いというお話が大西先生からありました。ある意味では、この仕組みが現実の三遠南信という社会をつくっているわけです。同時に仕組みとして考えるならば、同時に社会実験という捉え方もできるということだと思います。

こちらが、合意の形成です。県を越える、国境を越えても意味としては同じになりますが、まず交流の場をつ



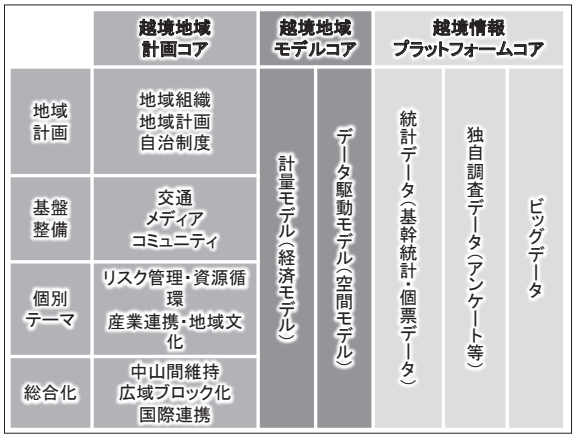
＜資料４　越境地域政策の社会実験＞

くる。先ほどのサミットです。交流の場が、やがて合意の場に発展をしていったのが三遠南信の例です。

その他、教育サミット、しんきんサミット、大学連携体もフォーラム化をしていく。それから、地域をつくっていくために地域計画をもつ。それが、その地域の将来を考えていく、調整をしていくベースになるわけです。これを進めるための機関としてSENAができたというわけです。こちらがSENAの細やかな構造ですが、どのような組織が入り何をやっているかということになります。

写真は「三遠南信地域産学官人材育成円卓会議」です。これは、来週月曜日（2014年2月17）に開催されます。三遠南信地区の大学の学長や経済界の代表、行政代表で、人材をどのように育成して、地域形成を図るかを考える仕組みです。このようなことが多様に行われています。また、下のところに「行政システム化」がありますが、ここでは「広域連合」の議論がなされています。

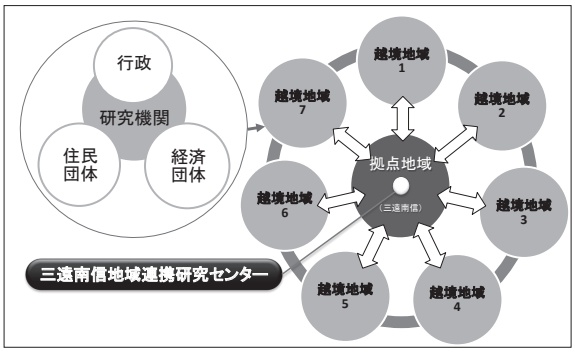
続きまして、越境拠点である愛知大学の三遠南信地域連携研究センターは、おおむね三つのことを考えようとしています。



＜資料５　越境地域政策研究コア＞

一つは計画的な議論です。これは分科会のなかで議論いただくような越境の課題がここに書いてあります。将来をみていくためには、モデル分析が必要ではないかと。例えば、産業連関的なモデルもハンディにつくれるようなことで、越境地域の方向性を見いだしていく。もう一つは、行政境界が切れていくということで、これは海外がもっと顕著かもしれませんが、計画あるいは将来を考えていくための情報の基盤に連続性がないということになります。

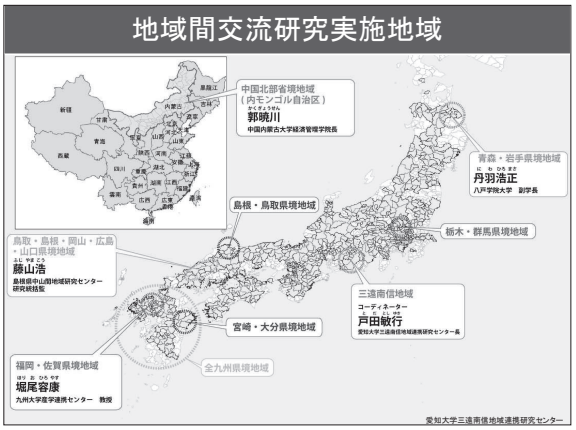
これは午後の第５分科会のなかで議論されます。計画、モデル、そして情報、三つで拠点を考えていこうということにしています。



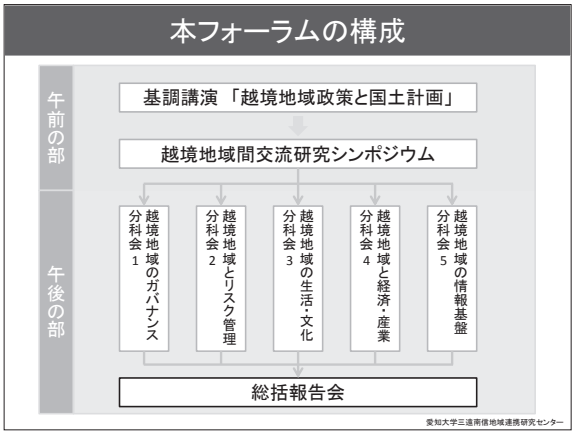
＜資料６　分散統合型の研究＞

「分散統合型の研究」とありますが、越境を考えるときに、ここにセンターがありますが、現実には各県境地域に問題があるということです。各地域でご検討をいただくような体制を取ろうとしております。それを「分散型」といっております。下に「地域間交流研究」と書いてありますが、各地区で越境のプラットフォームになる、あるいはその内容を研究している、それを拠点機関である三遠南信地域連携研究センターで統合的に考えていこうということです。

今日、お越しいただいたパネラーの方の地域を示していますが、日本全国に県境地域があるということです。まだここに採り上げているのは少数ですが、議論していく可能性は広いと考えております。本日、基調講演をいただき、シンポジウムでこの話題を広げて、あるいは問題としてみて、午後の各専門の分科会でご議論をいただくという流れになっております。



＜資料７　地域間交流研究実施地域＞

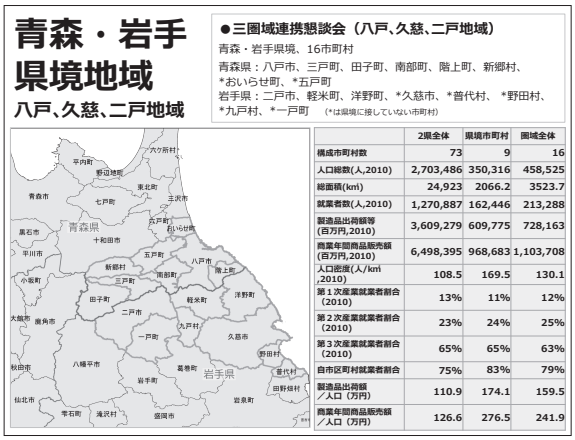


＜資料８　本フォーラムの構成＞

２．越境地域紹介

○戸田：趣旨説明が少し長くなりましたが、ここから早速、各地域のご事情・状況をご説明いただきます。北からと考えておりますので、最初に各越境地域の概要、あるいは連携の必要性といった点について、丹羽先生、藤山先生、こちらからの順番で３分程度ずつ、ご発言をいただきたいと思います。

それでは、丹羽先生からお願いします。



	2県全体	県境市町村	圏域全体
構成市町村数	73	9	16
人口総数(人,2010)	2,703,486	350,316	458,525
総面積(km²)	24,923	2066.2	3523.7
就業者数(人,2010)	1,270,887	162,446	213,288
製造品出荷額等(百万円,2010)	3,609,279	609,775	728,163
商業年間商品販売額(百万円,2010)	6,498,395	968,683	1,103,708
人口密度(人/km²,2010)	108.5	169.5	130.1
第１次産業就業者割合(2010)	13%	11%	12%
第２次産業就業者割合(2010)	23%	24%	25%
第３次産業就業者割合(2010)	65%	65%	63%
自市区町村就業者割合	75%	83%	79%
製造品出荷額／人口（万円）	110.9	174.1	159.5
商業年間商品販売額／人口（万円）	126.6	276.5	241.9

＜資料９　青森・岩手県境地域＞

○丹羽：ご紹介いただきました、八戸学院大学の丹羽と申します。よろしくお願いいたします。「八戸市を中心とした」といいますとオーバーですが、越境地域の概要として、特に青森と岩手の県境地域ということで、八戸市、久慈市、二戸市。ここが八戸市です。ここが岩手県との県境になります。そして、ここが久慈市です。NHK のテレビ番組『あまちゃん』で有名になった久慈の港がここにあります。それから、二戸市がここです。東北新幹線の二戸の駅がありまして、たまに停車する駅です。ここが八戸市です。今、東北新幹線は、ここからずっと来まして青森市まで通じています。今後は函館までつながる計画になっています。

特に、八戸と久慈と二戸の三圏域での交流を行っております。つまり、県境になるわけですが、このオレンジ色のところで越えているところは、三圏域をさらに広がっておりまして、こちらは秋田県です。特に、小坂町であるとか、「鹿」の「角」と書いて「かづの」といいます鹿角市、大館市、ここまで含めてざっくりと旧南部藩です。青森は、南部と、こちら側の津軽と、昔の藩でいうと二つに分かれておりました。どこの県でもあると思います。長野では、南信・北信といいます。ざっくりというと、仲が悪いと、よくいわれます。南部藩と津軽藩も笑い話にもよく出てくるように、昔は仲が悪かったということです。言葉もずいぶん違います。

久慈市は岩手県ですが、久慈市に行くには新幹線で八戸まで来て、八戸から八戸線で久慈まで行くというのが、おおむねの交通ルートです。やはり岩手の県北は、旧南部藩ということもありまして、八戸市を中心とした商圏であるということです。少し離れますが、この小坂町も八戸市まで買いものに来ます。また遠くは秋田県でも、日本海側の能代市からでも、車で２時間ぐらいで、来ることができます。

例えば、年末などで大きな買いものをしたいときなどは、八戸市まで、特に魚をよく買いに来られるという地理的な状況にあります。八戸市の地域の商圏は、約 70 万人です。全国で第一次産業の人口が一番多いのが青森県です。その意味では、水産だけではなく、農業も含めて自給自足がほぼできているところが特徴です。

八戸市の特徴からいいますと、新幹線が通っていることと東北自動車道の高速道路が通っていることです。それから、陸・海・空の自衛隊の基地があります。そして、三沢市には米軍の基地があります。この後出てくる防災において、大きな機能を発揮したという大きな特徴があるかと思います。私のご紹介は終わりにさせていただきます。

○戸田:ありがとうございます。南部地域になりますが、青森と岩手の県境地域のご紹介をいただきました。また後ほど、被災 3.11 に対する対応等も、ご発言いただきたいと思います。続いて、藤山先生、お願いします。

鳥取・島根・岡山 広島・山口 県境地域

●鳥取・島根・岡山・広島・山口
県境、53市町村
鳥取県：12（19）、島根県：11（19）、
岡山県：13（27）、広島県：11（23）、
山口県：6（19）（カッコは全市町村数）

鳥取・島根・岡山・広島・山口	5県全体	県境市町村
構成市町村数	107	53
人口総数(人,2010)	7,563,428	3,818,507
総面積(km)	31,915	21,966
就業者数(人,2010)	3,544,144	1,782,502
製造品出荷額等（百万円,2010）	24,608,282	14,018,487
商業年間商品販売額（百万円,2010）	23,368,373	9,131,638
人口密度(人/km,2010)	237.0	173.8
第１次産業就業者割合（2010）	5%	6%
第２次産業就業者割合（2010）	26%	27%
第３次産業就業者割合（2010）	68%	67%
自市区町村就業者割合	66%	76%
製造品出荷額／人口（万円）	325.4	367.1
商業年間商品販売額／人口（万円）	309.0	239.1

＜資料 10　鳥取・島根・岡山・広島・山口県境地域＞

○藤山：それでは、中国地方です。今日は広島から来たのですが、名古屋まで来たら大雪で足止めを食らいました。疲れ果てて小倉トーストを食べて、やっと脳に血が回りました。さて、中国地方のここを中国山地といいます。ここが越境地域です。ここに１万５千もの集落が究極の小規模点在状態です。このような地方は、おそらく世界的にもあまりないのではないかと思います。なぜ平均 100 人以下の、１万５千もの集落が山の奥に点在しているか。実は 100 年前、全国の鉄の８割は、ここで生み出されていました。いわゆる「踏鞴（たたら）」です。しかも循環可能で、木炭で再生可能でやっていたすごいところです。そういうことを古（いにしえ）からやってきましたから、ここの出雲平野、弓ヶ浜、そして岡山平野などでは、「踏鞴」をやったから平野になっているのです。本当は世界遺産ではないかというくらいです。

そういう珍しい地域です。ところが、1960 年代以降の高度成長は大規模集中型ですから、この究極の小規模分散性が見事に条件不利に変わっていきました。そして、「過疎」という言葉は中国地方から生まれたということです。

今、私は益田市に住んでいます。ここと合併した旧匹見町は過疎の代名詞にもなりました。60 年前は 8,000 人でしたが、今は 1,500 人です。このような状況が中国地方に広がったわけです。中国山地は共通する課題を抱えています。だからこそ全国に先んじていろいろな研究の連携組織ができました。我々の島根県中山間地域研究センターはここのど真ん中にあります。標高 500 メートルです。全国唯一で 15 年前に立ち上がりました。ただ、ここで一ついっておきたいことは、今、地殻変動というか、新しい風が吹き始めています。この５年、特に 3.11 以降、次世代の定住がどこで進んでいるのかといいますと、町の真ん中ではなく山間部なのです。あるいは離島で増えています。

匹見町には、まさに越境地域・県境沿いの道川というところがありますが、３年前には、小学生はたった３人しかいませんでした。しかし、今は 14 人です。このようなことが起きています。海士町なども有名です。いろいろな山の奥地や離島、山間部、新しい風が吹き始めたということも皆さんに、ぜひ紹介したいと思っています。これが中国地方の越境地域です。中国山地の状況です。

○戸田：はい、ありがとうございました。中国山地の、まさに過疎をどのように転換していくかという活動をずっと研究されています。後ほど実態をお話しいただきたいと思います。だいたい過疎地といわれるところは、県境の越境沿いのところがあります。続きまして、九州に渡りまして、九州大学、堀尾先生お願いします。

福岡・佐賀 県境地域

●福岡・佐賀県境　14市町
福岡県：久留米市、糸島市、小郡市、大川市、筑紫野市、那珂川町、福岡市、柳川市
佐賀県：基山町、吉野ヶ里町、佐賀市、神埼市、鳥栖市、唐津市

福岡・佐賀	2県全体	県境市町村
構成市町村数	80	14
人口総数(人,2010)	5,921,756	2,682,501
総面積(km)	7,418	2,288
就業者数(人,2010)	2,671,999	1,231,612
製造品出荷額等（百万円,2010）	9,874,608	2,324,326
商業年間商品販売額（百万円,2010）	23,962,305	16,985,584
人口密度（人/km, 2010）	798.3	1,172
第１次産業就業者割合（2010）	4%	4%
第２次産業就業者割合（2010）	21%	17%
第３次産業就業者割合（2010）	74%	79%
自市区町村就業者割合	53%	54%
製造品出荷額／人口（万円）	166.8	86.6
商業年間商品販売額／人口（万円）	404.6	633.2

＜資料 11　福岡・佐賀県境地域＞

○堀尾：ありがとうございます。九州から来ていることになりますが、生まれは松江でございます。藤山先生のおっしゃることは、よく身に染みてわかっております。このようにすると意外かもしれませんが、九州人全体をみると名古屋の中心と人々に対して、ちょっと苦手意識があります。なぜかというと、1584 年に豊臣秀吉が、黒田官兵衛を連れてきて九州平定に来たということから、今でもまだ苦手意識があります。

ただ、最近の大河ドラマの影響で、官兵衛が博多に長いこと住んでいたということもありますので、彼は九州

のヒーローであるということになりました。これがまた九州人の都合のよさも表しているのではないかと思います。秀吉と戦った経験があり、幕末には薩長連合ということで、九州が大連合を組みまして幕府を倒したわけです。九州も一つにまとまっている感じがあるのですが、実はそういうわけではありません。

今、ここに示している地図ですが、九州は筑後・熊本・鹿児島にあるシラス台地、それから宮崎平野があります。真ん中に筑紫山地と九州山地があります。通常の県境は、山脈に沿ってあって、あまり人の行き来がないところで設定されていますので、あまり問題がないですが、九州の場合は川に沿って設定されていることが多いです。必然的に川というかたちで生活圏が完結するところに行政区分が来てしまうという問題があります。一昨年、九州経済連合会が「九州はひとつ」ということを発言しましたが、翌日には新聞に「九州はひとつひとつ」という言葉が出ました。「いや、九州は、みんなバラバラでいいのだ」という考え方があることも事実です。

私がご紹介させていただきますのは、そのなかでも代表的な福岡県と佐賀県の間にある県境地域です。筑後川という九州で一番大きな川の流域に沿って生活圏ができているところです。皆さんもご承知の通り九州には、北九州市、福岡市、それから一昨年できました熊本市が政令指定都市としてあります。それと同じぐらいの人口と工業生産高を、この地域だけで産出していることがよくおわかりいただけると思います。

従いまして、今日の議題に沿いまして、このような地域を「県境、越境」といいますが、あるいは境が「クロスした」「交差した」といったほうがいいかもしれません。そのようなところで新しい成長機能をつくるにはどうしたらいいかということを考証して議論させていただきたいと思っています。以上でございます。

○戸田：はい。ありがとうございました。中部も「ひとつ」といいながら、「ひとつひとつ」といわれていますが。三遠南信も川沿いのエリアという歴史をもっているところ、二つの河川です。ちなみに、三遠南信センターは、研究員の内２名が九州ということです。２名が、蒋先生を含めて中国ということで、中部の人は１人もいないという状況です。そのほうが越境はみえやすいのかもしれません。九州の状況をご紹介いただきました。

続きまして、中国内モンゴル自治区の状況ということで、内蒙古大学の郭先生からお願いいたします。

中国北部省境地域（内モンゴル自治区）

●中国内モンゴル自治区
※周辺の8つの省・自治区と隣接：黒龍江省、吉林省、遼寧省、河北省、山西省、陝西省、寧夏回族自治区、甘粛省
※ロシアとモンゴル国に隣接
※省境市（10市）：呼倫貝爾市、興安盟、通遼市、赤峰市、錫林郭勒盟、烏蘭察布市、呼和浩特市、鄂爾多斯市、烏海市、阿拉善盟
※内モンゴル自治区の12の市の10が省境市

内モンゴル自治区	圏域全体	省境市
構成市数	12	10
人口総数(万人,2010)	2,472.9	2,039.66
総面積(万km,2010)	118.3	109.58
就業者数(万人,2010)	1,284.7	1,058.88
工業品総生産高(百万円,2010)	11,648,859	8,807,938
年間消費品販売額(百万円,2010)	4,925,427	3,679,599
人口密度(人/km, 2010)	21	19
第１次産業就業者割合(2010)	42%	43%
第２次産業就業者割合(2010)	21%	21%
第３次産業就業者割合(2010)	37%	36%

注:金額は1元＝17円で換算。

＜資料 12　中国北部省境地域（内モンゴル自治区）＞

○郭：皆さん、おはようございます。５年前に、佐藤学長が当時センター長のときに、内蒙古大学経済管理学院と学術共同研究の協定を結びました。この５年間の実績をふまえて、私は内蒙古大学経済管理学院を代表して、共同研究プロジェクトのなかの会議に出席できたことについて非常にうれしく思っております。こうした国際的な相互の研究交流、あるいは比較研究を通して、新たな知見が生まれてくるのではないかと確信しております。

我々の大学が所在する内モンゴル自治区自体が、中国最北端の地域です。最大の越境省境地域です。地図をご覧いただくとわかるように、内モンゴルの地形が細長くなっておりまして、中国の一番北のほうにあります。中国では、内モンゴルのことを「三つの北」という表現をします。つまり、「東北・華北・西北」を跨っている省境地域ということです。

基礎的なデータは、画面の右側に書いてあります。一つの特徴としては、内モンゴルは、やはり広い面積を持ち、人口が非常に少ない、人口密度の低い地域です。もう一つ特徴となるのは、内モンゴル自治区は中国の草原地帯であり、環境的な位置付けが非常に重要な地域です。内モンゴルとモンゴル国、さらにロシアのシベリアとか極東をあわせると、東アジアにおける重要な生態的な障壁になっているといえるでしょう。

さらに、もう一つの特徴は、この 10 年間の高い経済成長率です。この 10 年間においては、中国一番の経済成長率を維持してきました。内モンゴルは、中国のほかの地域といくつか違う特徴をもっています。つまり草原

地帯ですから、農業と牧畜業が盛んです。これが周辺のいくつかの省や自治区の間では、補完的な関係が生まれてきています。

もう一つは資源型産業です。石炭、レアアースといったものの資源地ですが、加工技術に関しては、他の地域との間で補完的な関係が生まれてきています。ここで一つの例を挙げますと、石炭の生産高は中国で一番となっており、全国の３分の１を占めています。乳産業に関していえば、乳製品の生産量は中国の半分ぐらいを占めています。地理的にみても、内モンゴルは東から西まで細長いかたちをしております。実際には八つの省と自地区と隣接しております。隣接しているのは八つですが、この新疆に近いということで、内モンゴルから認識すると、新疆・北京・天津といった地域も非常に近い連帯感をもっています。ですから、実際には、11 の省・自治区と隣接しているという概念が、内モンゴルの人々のなかにはあります。つまり、中国で越境地域政策を語る場合は、この内モンゴルは非常に典型的な地域です。

○戸田：ありがとうございました。内モンゴルの状況です。郭先生には、後ほど、その産業の特性について、草原の産業、あるいは資源型の産業からどのように越境を構成していくかという発言をしていただきます。ひとあたり地域の状況、あるいは問題意識のポイントをお話しいただきました。

３．主たる越境地域政策の紹介

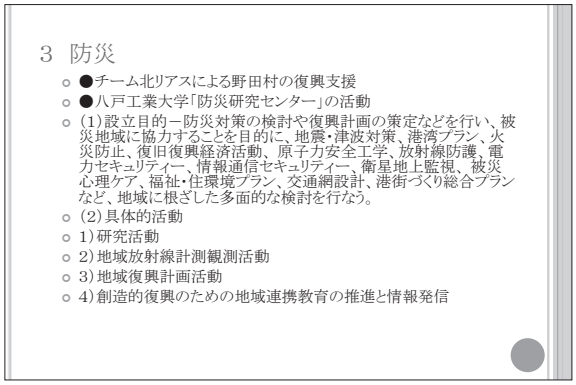
○戸田：次に、その内容、越境地域政策の紹介、あるいはトライの部分をお話しいただきたいと思います。丹羽先生からは、越境の 3.11 ということがございましたので、防災あるいは産業、この点をお話しいただきたいと思います。藤山先生からは、中山間地域と越境。そして、堀尾先生からは、特に地域を越えていく際の人の動きがありますので、交通、交通弱者という点からお話をいただきと思います。そして、郭先生には、越境地域と産業という側面から順次ご発言をいただきたいと思います。

それでは、丹羽先生から、また越境地域の状況と、特に防災面と産業面、その２点、活動政策をご説明いただければと思います。では、お願いします。

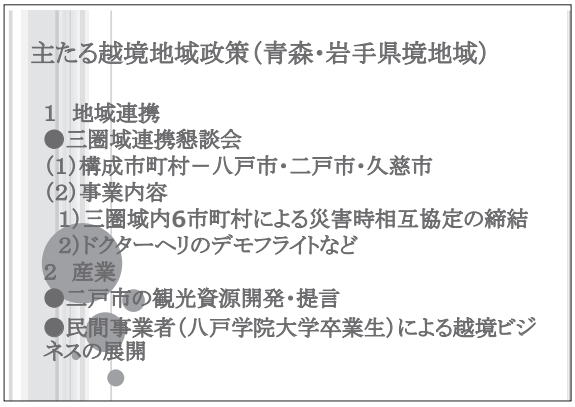
○丹羽：はい。それでは、最初に防災のほうからお話をしたいと思います。これは、特に 3.11 のことについてお話をしなければいけません。ちょうど、そのとき大学におりまして、過去経験のない揺れを感じました。この年になって、生まれて初めて、「死ぬな」と思いました。まず身動きが取れません。縦にも横にも不規則に揺れ動きまして、このまま本当に「ああ、死ぬのかな」と思いました。

ときどき、ちょっと揺れがとまるときがあったものですから、そのときに職員も教員も一斉に、建物の外に出て、建物を茫然と見上げていました。本当に、どこか崩れるのではないかなと。冬休みでしたので、学生たちがいなかったのが幸いでした。そして、すぐに停電になりました。ですから、情報が入りません。私どもの大学は、八戸市の郊外にありまして、太平洋側に向かうためには、車で５分も行くとすぐに海に出るというところです。ただ、八戸市のなかで一番高台にあるものですから、津波の心配は全然ないわけです。たまたまパソコンがあったものですから、職員の人が Wi-Fi で状況を知ることができました。「どういう状況なのだ」ということでみますと、最初に映った津波のシーンが八戸市でした。ですから、その後知人、友人等々から携帯電話に、大変たくさんの電話やメールが入ってきました。要するに、「生きているか？」という安否確認です。三陸の震災の津波のなかで、八戸市はちょうど最北端ですから津波の影響はありましたが、津波のためにお亡くなりになった方は数人しかいませんでした。そのほかには、たまたま宮古市にいたとか、三陸のほうにいらっしゃった方が被災をされてお亡くなりになりました。それから、船で漁をしている人が港にいたとか、そういう方がやっぱり多かったです。その意味では、被災地でありながら、大きな死者を伴う災害は極めて少なくて、どちらかというと家の倒壊が多かったです。港のほうは、ほとんど漁業関係者の施設と社屋がありましたので、不幸中の幸いでしたが、大きな災害がなかったということです。

それでは、八戸市の役割は何かということです。昔からの水産都市であり、工業都市でもありました。石油の基地もありました。それから、陸・海・空の自衛隊の基地があり、三沢市では米軍基地があると。米軍からは、「トモダチ作戦」ということで、すぐに三陸へ救援にいく、自衛隊もすぐに救援にいく拠点になったというかたちです。それから、エネルギーや食料の供給等々のものが全て、八戸市の使える港に船で来たと。先ほど申し上げましたように、三沢市には飛行場もありますので、空からも物資が届きます。それから、高速道路は、岩手県のほうの高速道路が使えませんでしたが、日本海を経由



＜資料 13　防災＞



＜資料 14　主たる越境地域政策＞

して物資が届く。そのような役割があったということです。八戸市の中心街は、港から離れておりますので、その意味で多くの人たちが被災から免れました。

八戸市の港のほうには新幹線の八戸駅があります。三陸のほうの久慈市に向かう八戸線が通っています。八戸市とその隣の階上（はしかみ）町の住民には、昔からある言い伝えがありました。「津波が起きたら八戸線を越えろ」というものです。その線路を越えると、今までの経験では安全だということで、その地域の住民は「八戸線を越える」、つまり「線路を越えろ」という非常にわかりやすいワンフレーズがあります。今回の大震災も八戸線を越えれば大丈夫だったということです。

つまり、避難路があるにしても、パッと頭に浮かぶフレーズがとても重要だと思います。みんなが、それを思い浮かべるわけです。みんなが八戸線を越えようとします。その地域ごとに、そういうものがあるといいです。ただ三陸のほうにいくと、海沿いに線路が走っていますから、当然、そうではない地域もあります。キャッチフレーズではないですが、何かパッと頭に浮かんで、すぐ行動できるイメージが湧くことがとても大切だということがありました。今度は八戸市の役割とありますように、供給基地があることがとても重要だったのではないかと思います。

地域連携ということでは、先ほどは三圏域の話をいたしました。ここではドクターヘリの防災に関していいますと、防災ではなくて災害時のことです。それから、緊急な手術が必要な場合などです。特に岩手県北の市町村は大きな病院がありません。今、八戸市立市民病院にはドクターヘリがあります。そこの救命センターは、全国ではとても有名な病院だそうです。ドクターヘリが30分でいける範囲が八戸市からですと下北半島、もちろん青森の津軽のほうまで、だいたいのところは30分でいくことができます。これは県だけではなくて、当然、岩手の県北にもドクターヘリが必要に応じて飛ぶということが可能になりました。「災害時相互協定」というものもあります。それから、ドクターヘリのデモフライトなど、そういう動きが活動的になってきました。

現在、青森県では、八戸市と青森市にそれぞれドクターヘリが1機ずつあります。この二つで青森県の全域はどこへでもいけます。それから、日本海側の岩手県の県北もカバーできるという体制ができています。それから、もう一つ重要なのは産業面です。災害から復興しても、働く場所がなければいけません。その中心となるのは、拠点となる八戸市であろうということで、その越境に関するビジネスの展開を、大学が「勝手連」ということで、どんどん仕掛けていこうではないかという動きを本学ではやっております。これについては、また次のときにお話をさせていただきたいと思います。

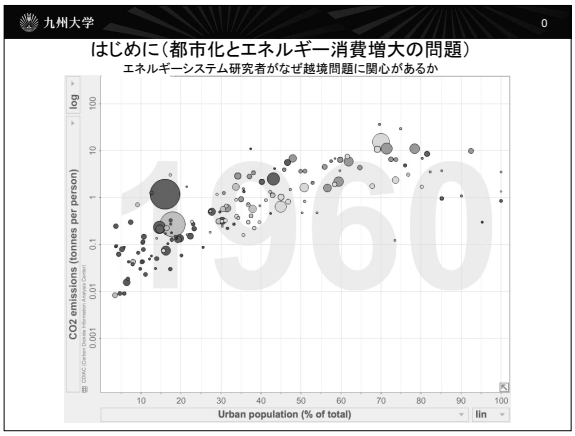
○戸田：ありがとうございました。八戸市は、青森と岩手の拠点ということになります。そこでの復興面においても、復興については、後ほど少し分科会でもご発言いただきます。復興と産業も含めた拠点としての役割を担っていくというお話をいただきました。

次に、堀尾先生に移りまして、越境するときには、交通が非常に大きなポイントになってまいりますので、九州での交通弱者、越境ということをお話しいただきたいと思います。

○堀尾：私は都市計画の専門家ではなくて、大学ではエネルギーと交通問題を主に教えています。今、お示ししているグラフですが、横軸にそれぞれの国の都市化率を表しています。そして、縦軸に1人当たりの炭酸ガス放出量を表しています。これが中国、これがインド、こ

れがアメリカです。それから、これが日本になります。

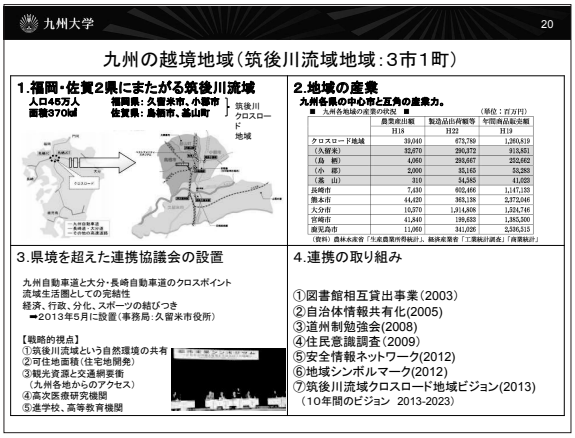
皆さま、ご承知の通り、1950 年にかけて世界の人口の 7 割近くが都市に住むといわれているなかで、いかに持続的な社会をつくっていくかということが大事です。そのためにも、この県境問題を解決していただく必要があると思います。



＜資料 15　都市化とエネルギー消費増大の問題＞

では、アニメーションでつくってみましたので、1960 年から時間に沿ってみてみたいと思います。それぞれの国家が、どんどん右上のほうにずれていくことがわかります。日本ですが、1960 年までは、キュッと上がっていますが、1970 年、1980 年代は停滞しています。ただ、ちょっとここでご覧いただきたいのが、1990 年から 2000 年に入ると、さらに都市化率が急に高まってきます。それから、中国、インド、日本も動き始めました。このように、世界各国は都市化率を高めながらエネルギー消費量を高めているという問題があります。これはちょっと考えると変な話です。全員が都市に集まってくるわけですから、効率がよくなってエネルギー消費量が減るはずです。しかし、なぜエネルギー消費が増えているのでしょうか。そういうことを考えるヒントとして、例えば県境にありますような、都市化とはまた違う地域においての効率がどんどん落ちているのではないかという仮説が成り立つわけです。

その意味で、今、都市の効率を高めるためには、さまざまな施策が実施されております。筑後川流域 3 市 1 町において、「筑紫川クロスロード協議会」ができました。県境を跨いで相互に図書館の本を貸し出す事業を始めましょうと。それから、避難情報等についても共有しましょうと。それから、道州制の暁には、あわよくば自分たちが州都になってしまいましょうということがあり



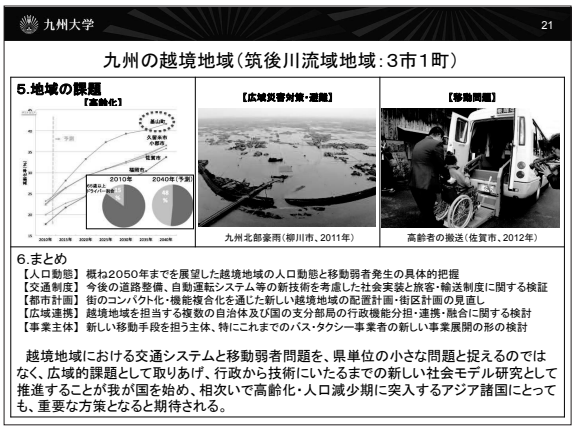
＜資料 16　九州の越境地域＞

ます。これが一つの仮想自治体のようなイメージをもって、現在、議論が進んでいます。

この地域の大きな課題ですが、高齢化率の進展がまったく違うということです。福岡市、佐賀市、小郡市、久留米市とありますが、2040 年には 40％台ですが、基山町については 50％に近いです。地域における高齢化率の違いに、どのように対応していくのかということです。これは私の研究室で、2040 年にかけて運転免許の人口推定を行ったものです。

2040 年には、免許人口の約半分が 65 歳以上になります。どのようなことを指しているかといいますと、80 歳、90 歳に近い人が運転をしてお買いものにいったり、病院へいったりするようになるということです。このような状況が今後 10 年、20 年以内に、確実に到来するわけです。

そのなかで、先日、九州が直面したように、集中豪雨のときの避難をどうするのか。介護が必要とされた場合、その人たちをどのようにしていくのかということありま



＜資料 17　九州の越境地域 2 ＞

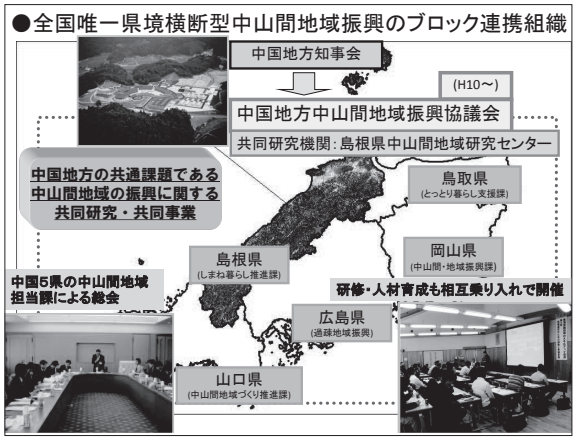
す。これについては大きな解法があるわけではないですが、一つのヒントになるのが行政だけではなく民の力を使って、避難や交通計画を維持していったらどうかということです。また、次のところで出てまいりますが、県境地域におきましては、市民の力を使って、防災や交通問題を解決していくという方向について報告させていただきたいと考えています。私からは以上です。

○戸田：ありがとうございました。交通問題は非常に大きな問題です。三遠南信では、どうやって地域をつないでいくかということで、自動車産業が多いものですから、電気自動車、二輪を越境で運営していこうという実験を、ここ２～３年行いました。技術的には自動走行などを織り込みながら人の動きの確保をしていくということになっていくのではないかと思いますが、示唆のある発言をいただきました。

続いて、藤山先生から、中山間からみた越境をどう考えるかということを、ご発言いただきたいと思います。

○藤山：中国地方の特色としては、中国山地中心に全国唯一、このような中山間振興のためのブロックの連携組織が知事会のもとでできています。来年度からは協議会が知事会の部会に格上げされます。この特色としては、私どものセンターがちょうど真ん中にあります。ほかの県も一緒にできるように、わざと島根県の真ん中につくりました。

このような分野を横断した、農業、林業、畜産、鳥獣対策も、私のような社会科学系もここで全部やるというセンターを持ちながら連携してやっています。このような仕組みを行っています。どのようなことをやっているかといいますと、いろいろと共同研究をして、「国土形成計画」に政策提言したり、研修や人材育成も相互乗り入れでやるといったことを、実際にさせていただいているわけです。



＜資料 18　全国唯一県境横断型中山間地域振興のブロック連携組織＞

なぜ、このようなことが中国地方で先にできたのかということですが、それは、先ほどのような「過疎」という言葉が生まれ、そういう状況が先んじて生まれたところにあるわけです。ですから、危機感も非常にあります。このままでは、まさに集落が消えることになっているわけです。

私は「2015 年危機」と呼んでいますが、来年です。来年に何が起こるかといいますと、中国山地と、中山間地域を支えてきた昭和一桁の方が全員80歳になります。ですから、どんどん亡くなり始めています。これは都市のほうも大変です。団塊世代が、来年には全員 65 歳以上になります。必ずなります。そうすると、いまや東京や大阪だけではなく、中国地方でも、広島や岡山では団地の高齢化率が、島根の山の中をどんどん上回りつつあります。団地でも半分が高齢者というところが続出しつつあります。

今度は、先ほど大西先生もおっしゃったような国土の危機です。あまりにも集中型にしたために、災害に非常に弱いです。そして、第 4 の危機とは地球の危機です。このまま中国やインドも含めて、あるいはモータリゼーションも含めて、集中型の国土にしたら地球がもつのでしょうか。このようなところに、今、我々は直面しています。このままでは、我が国では、最初は中山間、そして都市の団地、次はマンションも、地域をどんどん使い捨てにしていくことなります。全然、持続可能ではないということです。ですから、我々に与えられた命題は、いかに持続可能な地元をつくり直すかということだと思います。

そうした場合、この越境地域というのは、確かに今までの見方からすると縁辺地域です。明治維新もそうだと思いますが、物事というのは端っこからしかめくれません。真ん中からめくれません。逆に、これからの持続可能な社会をやった場合、越境地域あるいは縁辺地域こそが、その先端になり得るのではないかと思います。

このような問題意識をもって、いろいろな中国山地でも共同研究をやっています。むしろ、ここから『地域再生のフロンティア～中国山地から始まるこの国の新しいかたち（シリーズ地域の再生）』（農文協）という本でまとめさせていただきました。こちらの三遠南信の助成を

●大学、研究機関、行政、NPO等を横断した共同研究展開

「過疎」という言葉が生まれた中国山地だからこそ、他の地方に先んじた新たな地域運営のかたちが生まれている！

中国山地各地の実践を集約
→出版と成果共有のシンポ開催

『地域再生のフロンティア　～　中国山地から始まる この国の新しいかたち』
農文協　2013年11月5日　発刊

会場では、数十の地域再生のキーワードが提起された！

山陰中央新報　1月11日紹介記事

専門家ら200人シンポ

中国地方の中山間地活性化

<資料 19　大学、研究機関、行政、NPO
等を横断した共同研究>

受けて、先月の 1 月に 200 人もの熱気あふれるシンポジウムを行ってきたばかりです。

そちらは、今、このようなかたちで、皆さんのお手元にも概要を説明させていただいています。何がいいたいかといいますと、この半世紀、規模の経済一本やりできて、それが過疎過密を生み出したわけです。それで、もつのでしょうか。団地にしても、2 周目がみえないではありませんか。しかも大規模集中というのは必ずモノカルチャー（専門化）して、その事業最適でやっていきますが、1 周目はよくても 2 周目は使い捨てになるというなかで、もう一度、我々も生態系のように小規模分散で、そこで循環するかたちにしなければいけないのではないかということです。

生態系というのは、各地域、必ず多角形です。円の中に内接多角形を刻んでいくようなものです。武田信玄が「六分の勝ちでいい」といったように、一人勝ちしたら、もたないのです。ですから、もう一度、私どもは、中国山地の小規模分散性のなかに、むしろ先進性・持続性をみいだすような、小さな仕組みづくりを、この本のなかでは提言しています。それは小さな自治でもあるし、小さな組織です。そして、国土政策局でも小さな拠点づくりを、私も委員になって打ち出しています。今月の 24 日は「全国のフォーラム」を高知県で行います。これはどのような意味が込められているかというと、小さいからこそ地元に密着してできて、しかも自治、自分たちでできる、参加できる、運営できる。それから、いろいろな機能を併せもってできる複合性、小さいからです。農業だけではなく林業もエネルギーも一緒にやります。あるいは交通もです。このような法人も出始めています。ところが、これを縦割りの法制度がすごく邪魔をしています。

このようなところを逆に、全国に提起していかないといけません。我々としては、このような仕組みを訴えていきたいと思います。いうなれば、各国土の基本は地元だと思っています。一次的な生活圏、そこがきちんと自治であり、複合性であり、そして循環、小さいからこそ地元のもので回していくことができます。暖房も風呂も薪でやっていますが、一番持続可能で安全なわけです。このようなものの持続性を実証しながらやっていくことを、中国地方から全国へ発信していきたいと考えております。以上です。

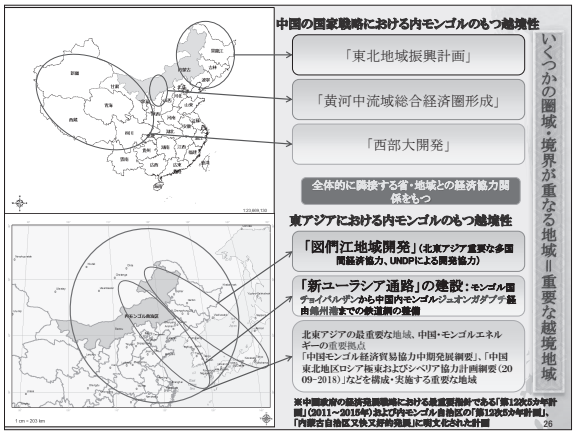
○戸田：ありがとうございました。小地区で、そこから自立の運営形態をとる、藤山先生の持論で、いろいろなところでも発言されています。今、三遠南信も 33 市町村ですが、小学校区に割ると 500 ぐらいになります。そうすると強さというのが、違う見方が出てくるということだと思います。縁辺から変えられるというのは、産業革命もその通りだと思います。フリンジのところから変化ということになると思います。

それでは、この 2 巡目の最後に、郭先生から、内モンゴル、産業の連携を、境界を越えてどうするかというお話をいただきたいと思います。

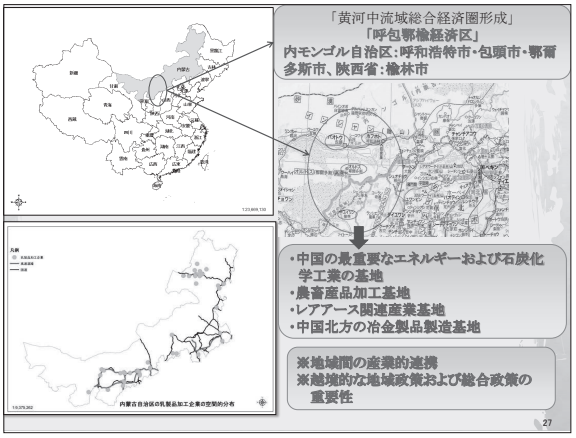
○郭：ありがとうございます。私の専門は産業計画と経済計画ですが、今日の話の中心的な内容は、やはり内モンゴル自治区の産業的な連携、産業的な計画について話をさせていただきたいと思います。

先ほど紹介したときも若干触れましたが、この内モンゴル自治区は、中国のなかで東西の幅が一番広い地域です。東西の幅が 4,300 キロメートルあります。飛行機に乗って、東から西までいくと 5 時間かかります。そういう関係もあって、産業と生態系が東西によってまったく違います。そういう東西の違いがあるため、内モンゴルの地域の持続可能性を考えるときには、小さな地域の循環型、あるいは持続可能性が非常に重要になってきます、このような点は、先ほど藤山先生の観点と非常に同じだと思います。

もう一つは、広範囲でみる場合は、今までは内モンゴルのなかに、いくつかの県とかが存在しました。広範囲の産業計画を計画するときに、県だけでは成し遂げられない部分があります。もう少し広範囲の産業計画が必要ではないでしょうか。それはやはり越境になるのではな



＜資料 20　いくつかの圏域・境界が重なる地域
＝重要な越境地域＞



＜資料 21　内蒙古自治区の越境的産業連携＞

いかと思います。

この 10 年間、内モンゴル自治区の経済成長率は、中国 1 位を維持してきました。しかし、生態環境の代償が非常に大きかったです。それは破壊が大きく持続可能性からいうと、生態環境が劣悪な状況にあるということは指摘しておかないといけないと考えています。このように、いろいろな環境・産業・経済の特徴がありますから、地理的に東西の幅が広いことで、内モンゴル自治区は、中国の国家的な戦略のなかでは、かなり分断されているということが発生しています。

例えば、内モンゴル東北部は、中国の「東北地域振興計画」のなかに入っています。これは黒竜江省、吉林省、遼寧省も入っていますので、内モンゴルの東北部は、中国東北地域の一つのブロックのなかに入っていることになります。この経済ブロックの一つの特徴としては、農産業、畜産業、特に乳産業を中心とした産業形成です。もう一つは、「黄河中流域総合経済圏形成」ですが、このあたりです。このような場合は、内モンゴルは、華北、山西省の一つのブロックのなかに入っております。このブロックの特徴としては、レアアース、石炭、エネルギー産業が中心となっています。このようなものが中心となり、天津を中心とした渤海湾の総合計画のなかにも入っています。このブロックは、今、中国の最重要なエネルギーと重化学工業の基地となっています。

もう一つは「西部大開発」ですが、内モンゴル自治区の主に中部と西部が計画のなかに入っています。この特徴としては、やはり生態環境の保護保全がメインテーマになっていますので、このようなベースを通して、中国東部、内モンゴル東部の環境保全のために、重要な役割を果たすという位置付けになっています。

内モンゴル自治区を東部・中部・西部と、段階的に越境の概念が非常に濃いです。そして、周辺地域との経済連携が非常に密接で 3 段階の越境ブロックを形成しているといえます。もう一つ、産業に関していえば、産業チェーンの一体化を周辺地域とどのように補完的に協調してやっていくかということが、非常に大きな課題になっています。例えば、このへんを例でみますと、資源、エネルギー、石炭などの原料は内モンゴルで、それを使った製造業とかが北京周辺にあります。最終的な消費マーケットが北京や天津のような都会という産業的な補完関係をどのように維持していくかが重要です。

もう一つは、産業政策の一致を考えています。そのなかには価格や生産規模などの内容が含まれています。もう一つは、モノと経済だけではなくて、人間の活動、流れを県境地域、省境地域でどのように考えていくかということが大きな課題になってきています。我々の研究も、省境地域のラインに沿って研究してきました。どうも、ありがとうございました。

○戸田：ありがとうございました。4,000 キロメートルという広大なエリアですが、省単独よりは、各省の産業が越境したエリアのなかでこそ成立していくというご報告をいただきました。

4．各越境地域における研究展開について

○戸田：それでは、最後の一巡になります。今、地域の状況あるいは政策を挙げていただきました。しかしながら、越境して実施していく、あるいは研究していくことは、なかなか困難であるというのが、三遠南信の経験でもあります。

そこで、最後に越境地域における、これからの研究の在り方、あるいは各地域での拠点のつくり方、ネットワークの在り方、拠点相互のネットワークはどうしていくのか。本来の拠点の意味合いは、そのネットワーク性から越境の政策を考えていこうという協調性にあるわけです。最後に一巡、1～2分になりますが、越境地域相互がどのように手を結んでいくのか、あるいはご自分の地域で、これから越境というものを、研究から政策に、あるいは研究自体をどのように発展させていくかというご発言をいただきたいと思います。丹羽先生から順番に、お願いします。

○丹羽：はい。はじめに八戸地域の北東北の越境等についてですが、その地域の活性化において、我々の研究内容について申し上げます。まず、八戸市内には、八戸工業大学と八戸工業高等専門学校と本学等の工学と、社会科学系の機関がありますので、3校での連絡協議会を開いております。それから、八戸市と3校とが連動して八戸市都市研究会というものを、テーマを決めて、市の要望等も受けながら、それぞれの機関が得意とする分野を持ち寄って、年1回の活動報告をして、市に提言をするという活動をしております。

それから、それに関連してですが、八戸高専の防災についての活動につきましては、分科会2で、高専の河村先生がご報告をされますので、ぜひお聞きいただければと思います。

あとは、都市との共存共栄がとても大切ではないかと思います。全国の地域の拠点との連動もとても大切ですが、第2の拠点としての位置付けが大切ではないでしょうか。例えば、防災等もそうですが、何か事が起きたときに機能しないことが起きるわけです。そのときに、第2の拠点として、越境地域はとても有効ではないでしょうか。一つの例でいうと、八戸の地域は被災地でありながら、ほとんど被害がありませんでした。その意味では、都市との共存共栄、都市との交流、このようなフォーラムなども、ぜひ都市の大学等にも入ってもらい、問題点を把握・理解し合って、お互いが助け合えることがあれば助け合いながら、お互いに共同で研究を進めていくことも、今後、必要ではないかと思います。以上です。

○戸田：ありがとうございました。既に三つの大学が、越境を支える役割ができていると。それと越境だけではなく、都市部との連携の仕方で重層性をというご発言であったと思います。では、藤山先生、お願いします。

○藤山：はい。この越境地域でも縁辺地域になりますが、ここから本当はめくり返さなければいけないときに、誰が一番邪魔をしているのか、あるいはスカートを踏んでいるのか。それは地方公務員です。この人の意識なり、スキルが変わっていないです。ずっと大規模中央指向をまだ引きずっています。これでは話になりません。実際に、我々の綿密な人口シミュレーションによれば、人口500人当たり、いくら過疎高齢が進んでも、500人当たりに1組、20歳代、30歳代、60歳代の人が入ってくれば、人口は盛り返せるというデータが出ています。そのなかで、いまだに中央指向で定住と循環の翼をたたもうとしています。このような地方行政の在り方が、まだ戻っていないです。翼をたたんでしまうと、国土的にも、地元的にも胴体だけですから落ちてしまうわけです。そこがわかっていません。

では、お金はどうするかというと、すぐに全国的なヒット商品とか、財政を「中央政府が助けてくれ」というのですが、経済状態を調べたら3分の2以上を域外から買っています。そういうところへもってきて、やたら大きな給食センターなど建てて、結局、外の野菜ばかりを使っています。こういう机なども、どこへいっても同じ物ばかりを使っています。これでできるわけがありません。そして、エネルギーは24兆円、海外から買っています。そこを1%ずつでも取り返せば、必ず定住は実現できます。

今、地方公務員を全部アマチュアで20歳代の若いところで採用しています。そうではなくてプロとして育てていくような、いわば連合大学院のようなものを越境地域なり各ブロックにつくっていかないと、いつまで経ってもパイプが詰まってしまいます。公務員だけではなく、次世代の学生も、そして中国、インド、アジアの次世代も大規模集中型でやったら地球が終わるわけです。そこで、一緒にやるようなインターローカルな仕組みをやっていくことが必要だということです。それが将来の輸出産業です。もう製品を輸出する時代ではないです。社会のシステムごと輸出するぐらいの思い切ったことをしないと、めくり返せないと思います。以上です。

○戸田：ありがとうございました。「人」だということですね。

○藤山：はい。

○戸田：人の意識改革を。これだけで1時間ぐらい話ができそうですから、これは分科会のほうでやっていた

だくことにします。やはり根本的なところだと思います。連合大学院ということで、エリアごとに、そういうことを目的としたところが必要だというご発言だったと思います。次に堀尾先生、お願いします。

○堀尾：はい、ありがとうございます。まず壇上をお借りしまして、御礼を申し上げたいのですが、愛知大学のなかに文部科学省の共同利用拠点ができました。「越境地域政策研究拠点」といいますが、これが昨年できたことを契機に、今日も佐賀大学から後藤先生がお越しですが、筑後川を挟んで二つの大学の連携が既に始まっています。このような拠点ができたことによって、日本全体が確実に変わりつつあります。今後、将来にわたり、ここに書かれているような、もう少し学術的にも骨太な分析をするべきではないかという議論も高まっています。

そして、ここから先は、お願いですが、今日、ここに学術会議の大西先生もお越しです。科研費のなかに、まだこのボーダースタディーズに相当する領域ができていません。一方、ヨーロッパをみますと、ユーロスタット（Eurostat）のような、まさにボーダースタディーズ（境界研究）にフォーカスした研究予算がありますので、その意味で、ここにお越しの大学の皆さま、自治体の皆さまと協力して、そういう研究する領域の環境がよくなりますように、ぜひお願いしたいと思います。私からは、以上です。

○戸田：ありがとうございました。エールを送っていただきました。研究のことについては、後で大西先生から発言をいただきたいと思いますので、お願いします。それでは、最後になりますが、郭先生、お願いします。

○郭：越境地域政策の研究に関して、いくつか感想を述べさせていただきたいと思います。第１点は、今までの行政境界をどのように取り払い越えていくことは、非常に難しい問題です。今日、ご紹介したように、内モンゴルの越境的な連携や産業連携は、やはり中央が主導的にやってきているわけです。本当の越境的な連携を実現するために、いったいどのような仕組みが必要なのか。そして、その市と市の間で、どのような社会的な資源を活用しながら、本当の目標に向かっていけるのか。これは大学、あるいは我々が研究するものではないかと思います。

今までは、中央あるいは行政の力で主導的にやってきたのですが、この社会的な要素・資源をどのように活用して、大学も含めた社会のなかで、それをどのように活用しながら、本当の越境的な地域連携などを考えること大事になってくるのではないかと思います。これが第１点です。

２点目としては、やはりグローバルというものを考える際に、下からいくと県だとか国の境界を越えていくと、直面するのがグローバルという問題です。グローバルを考えるなかでは、例えば中国の経験、EU の経験、日本の経験など、いろいろな経験を比較して、そこからの交流によって新たなものが生まれてくるのではないかと思います。この越境地域政策を考える際に。

最後の一点ですが、いろいろな交流、越境がありますが、やはり一番重要なのが、人の越境、人の交流ではないかと思います。我々の共同研究、研究テーマの越境だけではなく、そういうものを中心とした研究者の交流だけではなくて、実際の企業人、学生、社会人の交流も、さらに重要になってくるのではないでしょうか。こういう人たちが、いろいろな境界を越えて交流することによって、本当に実を結んだ社会的な現象、効果が生まれてくるのではないか思っています。

例えば、去年の 11 月に、佐藤学長と戸田先生のいろいろなご支援のもとで、内蒙古大学の EMBA（Exective MBA）の学生の日本研修が成功を収めました。それは、一つの人的な越境であり、双方の経験の交流です。彼らは、日本でみて、研修を経て、講座によって、いろいろな知見を中国に持ち帰り、その交流の実が、２年後あるいは何年後かに、やっとその成果が徐々に生まれてくるのではないかと思います。やはり人的な交流、人的な影響が重要だということを最後に強調しておきたいと思います。ありがとうございます。

○戸田：ありがとうございました。人的な越境ですね。まず人のつながりがベースになっています。その通りだと思いました。また、政策的にも、午後に採り上げられると思いますが、EU の国境政策にみられるような制度的なものも、日本のなかで求めていくことが必要ではないかと思います。

たくさんの越境地域から出てくることを制度化していくこと。また、国境自体が揺らいでいることが、結局、国内の境界の揺らぎ、国内境界を越えていくという状況をつくっているという感じも非常に強くするわけです。その意味で、これからやっていくことは、非常に多いわけです。学術会議のご支援という話もありましたが、かなり広い範囲の議論が必要と感じます。最後に、総括的

に大西先生に、シンポジウムにコメントをいただきたいと思いますが。よろしくお願いします。

○大西：先生方、大変刺激的な議論をありがとうございました。越境という一つの言葉から、いろいろな切り口があるということをあらためて知らされました。午後は、五つの分科会が行われるということで、さらにいろいろな論点が深められるということを期待しています。

ちょっと振り返りますと、一時「新たな公」という言葉が取り上げられました。どちらかというと、越境、わりと中山間地域で行われている地域を支えるような活動に、光が当てられた時期がありました。結構、これを頑張って進めていたのが、鳩山さんという首相になった方です。彼が辞めてから、この話題も何となくトーンダウンしているようにも思います。首相はともかくとして、提起した「新たな公」、つまり民間の人たちが行う公の活動といいますか、社会を支えるような活動というのは、非常に重要な意味をもっていたと思います。しかし、こうして愛知大学を中心とした越境地域政策研究の拠点が決められて行われることは、文部科学省等にも、こういうことが大事だと思っている人がいるということです。まさに、この拠点を中心に新しい研究の流れが再構築されることは、非常に大事なことだと思います。

研究の柱ですが、学術会議では、昔は何かそういうことが役割として与えられていたようです。科研費の審査員なども学術会議へ推薦した時代があったようです。残念ながら現在は、まったくそういう世俗的権力から離れて、提言活動等をひたすらすることになっています。しかし、非常にたくさんの会議が行われ、いろいろな提言を出しますが、まさに、こういうテーマに近い議論も地域研究のグループもあります。学術会議の活動として、地域のことをテーマにした活動もやっていましたので、ぜひ、学術会議でも、皆さんの議論を受け止められるようなことを考えていきたいと思います。大変刺激的な議論をありがとうございました。午後の議論も期待しています。どうも皆さん、ご苦労さまでした。ありがとうございました。

○戸田：大西先生、ありがとうございました。各パネラーの先生、どうもありがとうございました。非常に短い時間で、言い足りなかったことが多かったと思いますが、五つの分科会で、その内容を、もう一度ご発言いただく機会があろうかと思います。午後、ご参加の皆さんも、この議論を深めていただければ幸いであると思います。どうもパネラーの皆さん、ありがとうございました。

（終了）